



Title	第4回日本国際小児保健学会学術大会2020 開催報告
Author(s)	田中, 孝明
Citation	目で見るWHO. 2021, 75, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第4回日本国際小児保健学会学術大会 2020 開催報告



川崎医科大学小児医科学教室 講師

田中孝明

2002年、長崎大学医学部を卒業後、中米の私立病院で小児科臨床研修。以後、国内での勤務を経て2010年より現職。日本国際小児保健学会副代表。

1. はじめに

2020年9月19日、日本WHO協会共催のもと、「すべての子どもたちに寄り添う—Withコロナ時代に向けて—」をテーマとして第4回日本国際小児保健学会学術大会2020をオンライン形式で開催いたしました。小児のCOVID-19（Coronavirus disease 2019）に関するシンポジウム2部構成とし、ウェブ会議サービス「Zoom」のウェブセミナー機能（主催者・演者用）を用いてYouTubeライブ配信（視聴者用）を行いました（図1）。参加登録者は400名で、総再生回数（オンデマンド配信を含む）は第1部722回、第2部516回と盛会のうちに終了いたしました。

2. JICHA（通称：ジッチャ）のご紹介

「日本国際小児保健学会（Japan International Child Health Association：JICHA）」の夜明けは、日本WHO協会・理事長の中村安秀さんをはじめとした有志らによる1995年の決起集会から始まります。「国際小児保健医療の集い」として設立され、「国際小児保健研究会」として47回の学術大会を経て、2017年に現在の名称で学会となりました。設立当初から「子ども、健康、国際」をキーワードに、国際保健医療や小児保健に関する活動および研究を行ってきました。会員数は180名と小規模ですが、国際保健分野のレジェンドや有名人にすぐ会える学会です。私は

2006年から本学会に関わっていますが、諸先輩方から若い世代へ国際保健に対する熱い思いが脈々と受け継がれています。

3. 学術大会開催への経緯

国際保健は本来「世界の国々や地域の健康格差を解明・解決する学問」です。時代の変化とともに健康格差が減少してきたことは事実ですが、母子保健、栄養、災害医療、環境問題、虐待、感染症、非感染性疾患、アウトバウンド・インバウンドなどの分野において、救いの手を必要とする子どもたちは依然として存在しています。マイノリティの彼らを見て見ぬふりをするのは容易であり、寄り添うには大きなエネルギーを必要とします

が、国際保健医療に従事する私たちの使命として、「だれひとり取り残さない（no one left behind）」ために「すべての子どもたちに寄り添う」をテーマとして、今年度の学術大会の準備を開始いたしました。しかし、2019年末からのCOVID-19パンデミックにより、あまりに突然に世界が変わり果ててしまいました。街の風景は静かですが、まるで目に見えない戦争や大災害が起きているようでした。誰も悪くないのに厳しい誹謗中傷や差別までもが蔓延しつつありました。当初、その流行の影響で大会開催の中止が検討されましたが、先の見えない暗闇の中でまだ答えがないものに立ち向かうために、また今しかできない学びの場を提供するために、オンライン形式での学



図1. 演者・座長の記念写真

術大会の開催を決断いたしました。

しかしながら、これまで学会請負業者に委託せずに手作りで運営してきた私たちにとって、初めての試みは障壁の連続でした。その中で、手作りのオンラインセミナーを次々と成功させてきた「日本WHO協会・関西グローバルヘルスの集い」のみなさんが手を差し伸べてくださいました。オンラインによるキックオフミーティングでは多くのスタッフの方々がご参加くださり、メールによる連日のご指導により少しずつ形になってきました。また、「関西グローバルヘルスの集い」オンラインセミナーの運営側、舞台裏にもご厚意で参加させていただき、自信を持って学術大会当日を迎えることができました。

4. 学術大会概要

学術大会は「すべての子どもたちに寄り添う —With コロナ時代に向けて—」をテーマに小児の COVID-19 に関するシンポジウム2部構成といたしました(図2)。

第1部「国内外の小児 COVID-19 総ざらい」

(座長：中野貴司さん、田中孝明)

日本と世界における小児 COVID-19 の現場では、今何が起きているのか、今何をしているのか、今後どのようにウイルスと付き合っていくのか、先の見えないうちで、国内外の専門家から最新情報を提供し、日本と海外で相互に学び合う場を目指しました。

(1) 世界と日本の小児 COVID-19 の状況

高橋謙造さん(帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授)

小児科医、公衆衛生学専門家の立場から、小児 COVID-19 の臨床的特徴(感染者数が少ない、軽症例が多い、主たる媒介者となりにくい、各国から川崎病様症状を有する患者が報告されている)、死亡者数が少ないアジア・オセアニアにおけるファクター X の存在(BCG ワク

第4回日本国際小児保健学会 学術大会2020

すべての子どもたちに寄り添う
—With コロナ時代へ向けて—

日時：2020年9月19日(土) 13時30分～17時(予定)

形式：オンライン開催 (YouTubeストリーム)

大会長：田中孝明(川崎医科大学小児科学教室)

共催：日本WHO協会

参加費：無料

第1部

国内外の小児COVID-19総ざらい

1. 高橋謙造(総論)
2. 神谷 元(日本から)
3. 窪田祥吾(アジアから)
4. 氏田由可(欧州から)

第2部

誰ひとり取り残さない社会へ

1. 中野貴司(学校生活)
2. 山元 佳(インバウンド診療)
3. 柿元真知(メンタルヘルス)
4. 加藤琢真(オンライン診療)

敬称略



図2. 学術大会ポスター

チン接種の影響、感染対策の効果、生活文化の差異、遺伝的要因、ウイルス遺伝子変異の影響、自然免疫記憶など)、新型コロナウイルスワクチンへの危惧や予防接種控えの問題点などについて、情報提供をいただきました。公衆衛生学専門家ならではの視点でエコロジカル・スタディ(BCG ワクチンや経口生ポリオワクチンが COVID-19 に与える影響)に注目している点が印象的でした。また高橋さんは週6回にわたる COVID-19 最新情報をメール配信しており、総論を解説していただくのに適任でありました。

(2) 積極的疫学調査の経験から

神谷元さん(国立感染症研究所感染症疫学センター 主任研究官)

積極的疫学調査班の立場から、COVID-19 の疫学情報(国内における15歳未満の小児患者は全年齢層の約2%、そのうち無症状患者は7.5%)、感染源(6割が家庭内感染)、感染リスク因子(マスクの有無、対人距離、集団活動など)、誹謗中傷の問題点(メディアの取り上げ方やSNSの影響)、流行のコントロールを達成した国々では現場に即した政治判断が行われている点などについて、情報提供をいただきました。神谷さんが米国CDCの実地疫学専門家養成プログラムで学んだ「靴底に穴があくほ

ど現場に行って現場に寄り添った調査を
しなさい」という教えの通り、クラスター
発生の際に全国を駆け巡り、本当に靴
底に穴があいてしまった画像(図3)が
深く印象に残りました。私たちはメディア
で放送されない裏側の苦労や努力のお
かげで現在の生活を維持できていること
を忘れてはなりません。

(3) ラオスのコロナウイルス感染症の 状況と対策

窪田祥吾さん(WHO ラオス国事務所 母
子保健チームリーダー)

WHO 専門家の立場から、人口約 700
万人のラオスにおける COVID-19 の現
状(政府のリーダーシップや環境要因に
より感染者数わずか 22 人:2020 年 8
月末時点)、急速な感染拡大の抑制(流
行早期の入国制限、都市ロックダウン、
隔離施設の設置・強化、サーベイランス
強化)および二次的災害の防止(妊婦健
診や施設分娩数の減少による妊産婦・新
生児死亡の回避)に関する方策について、
情報提供をいただきました。医療資源の
限られた国において、普段から行われて
いる政府や WHO、そしてラオス国民自



図 3. 全国を駆け巡って穴があいた靴底

身による保健活動がそのまま COVID-19
対策に活かすことができた印象を受けま
した。また、ラオスに上陸した台風の影
響で発表当日にインターネット環境の確
保に苦慮した裏話もありました。

(4) スイスを中心とした欧州の経験か ら学んだこと

氏田由可さん(国際労働機関ジュネーブ
本部 労働行政・労働監督・職業安全衛
生課 安全衛生専門官)

欧州滞在者、学校の保健安全アドバイ
ザー、小児科医の立場から、人口約
850 万人のスイスにおける COVID-19
の現状(累計感染者数 4 万 7 千人、死
亡者数 1,800 人:2020 年 9 月 11 日
時点)、ロックダウンにおける生活(外
出制限、オンライン授業、テレワークな
ど)、ロックダウン緩和後の対策(自己
診断ツール、濃厚接触確認アプリの導入、
マスク義務化)、日本語補習学校の状況
と課題(オンライン授業、その後の授業
再開)について、情報提供をいただきま
した。日本人の経験していないロックダ
ウンにおいて、生活の上で大きな支障が
なかったこと、職場や学校の閉鎖開始よ
りも閉鎖解除の方が困難であったこと、
が印象に残りました。オンラインでの学
術大会開催は海外からの参加が可能であ
ることがメリットの一つですが、時差の
問題がデメリットでした。スイスの現地
時間で早朝 5 時からの参加にもかかわらず、快く演者をお引き受けいただきま
した。

第 2 部「誰ひとり取り残さ ない社会へ」

(座長:浦部大策さん、足立基さん)

小児 COVID-19 は患者数や重症例が
少ないと言われています。しかし、コロ
ナ禍において学校閉鎖や授業再開、外国
人小児診療、社会状況やメディア報道に

よる心へ与える影響、受診形態など、目
に見えない大きな問題が生じています。
だれひとり取り残さないために、様々な
分野の専門家による情報提供から、子
どもたちが困っていることに対する解決
の糸口を探りました。

(1) コロナ禍の学校生活

中野貴司さん(川崎医科大学小児科学教
室 教授)

小児科医、感染症専門家の立場から、
日本小児科学会ウェブサイトの紹介(小
児 COVID-19 の医学的知見:学校や保
育所におけるクラスターは稀である、学
校閉鎖は流行阻止効果に乏しい、学校生
活は子どもたちの育成に必要である)、
学校閉鎖の意義と小児の成長発達に与え
る影響、世界における学校閉鎖の現状、
コロナ禍における学校生活の心得(図 4)
について、情報提供をいただきました。
感染症の歴史で侵してきた過ちを繰り返
さないよう、国民が心を一つにして感染
症で差別・偏見を起こさないことが大切
である、という強い思いがよく伝わりま
した。

(2) 99.9 — これからのインバウンド対 応 —

山元佳さん(国立国際医療研究センター
国際感染症センター 医師)

外国人診療専門施設における感染症専
門家の立場から、訪日外客数の減少(昨
年比の -99.9%)、インバウンド対応は在
留外国人数が主流であること(外国籍で
あることが COVID-19 のハイリスクと
は言えない)、インバウンド診療の問題
点と対応(文化への配慮、遠隔医療通訳
の利用、在留外国人の医療費支払いは日
本人と同様、諸外国との往来を可能にす
る渡航制度)について、情報提供をいた
だきました。COVID-19 に対する抗凝
固療法ではブタ由来成分を含むヘパリン

を使用するため、特定の宗教信仰者に配慮が必要である、という多くの医療者が気付いていない鋭い洞察が印象的でした。

(3) コロナとココロ～児童精神科の視点から～

柿元真知さん（三重県立子ども心身発達医療センター 医師）

小児科医出身の児童精神科医という稀少な立場から、急激な学校閉鎖で生じた学校・地域社会との断絶による情緒的不安定やゲーム依存の問題、変化が苦手な自閉スペクトラム症児に与える影響、COVID-19 自体への恐怖心、外国人小児における家庭環境の問題について、情報提供をいただきました。演題名「コロナとココロ」と言うポップなネーミングセンスだけでなく、子どもたちに寄り添った診療にも大変感銘を受けました。

(4) With コロナ時代のオンライン診療

加藤琢真さん（厚生労働省 医政局医事課 医師養成等企画調整室長）

厚生労働省、新型コロナ対策推進本部医療班の立場から、国内のオンライン診療の現状と課題（無診察治療禁止からオンライン診療推進への変化）、コロナ禍における電話・オンライン診療の現状（件数の増加、3～4割が小児年齢の利用）、服薬指導の実際について、情報提供をいただきました。コロナ禍において、オンライン診療の分野でピンチをチャンスに変えるという厚生労働省の意気込みが大変よく伝わりました。また、本学会の事業である在外教育施設（日本人学校、補習授業校）の児童を対象とした遠隔健康医療相談（メール）の今後の運営においても大変参考になりました。

5. オンライン開催の特性

コロナ禍における学術大会やセミナーは、現地開催、オンライン開催（ウェブ

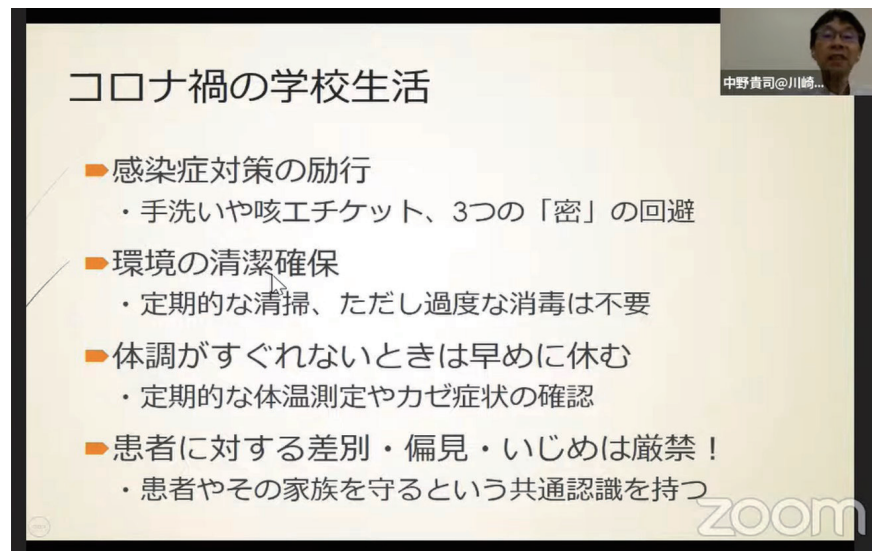


図 4. コロナ禍における学校生活の心得

会議サービスまたは YouTube ライブ配信）、ハイブリッド開催（オンラインおよび現地開催の併用）など、開催様式の幅が広がりました。現地開催では人とのつながりが得られる一方で、時間的・場所的アクセスに制限が生じます。オンライン開催では、参加者・演者からのアクセスが容易となり、予算の削減も見込めますが、ややインタラクティブな議論に欠けてしまいます。ハイブリッド開催では、それらのデメリットを多少補うことができますが、高度な技術を要します。今回は、ウェブ会議サービスを用いて YouTube ライブ配信を行いました。参加登録者 400 名のうち、職種の内訳は、小児科医 51%、小児科医以外の医師 13%、パラメディカル 12%、学生 7% でした。年齢層の内訳は、40 歳代 29%、50 歳代 22%、60 歳以上 21%、30 歳代 17%、20 歳代 9% でした。参加地域の内訳は、北海道から沖縄県まで、さらに 19 名が海外からの参加でした。過去の本学会学術集会と比較して、より多くの人数、幅広い職種・年齢層・地域（国内外）からご参加いただくことが可能となりました。

6. 学術大会まとめ

国内外の様々な立場の演者から小児の COVID-19 を取り巻く状況について情報提供があり、活発な討論が行われました。外国人や神経発達症児などの少数派も含め、だれひとり取り残さないために、全ての子どもたちに寄り添うことが、With コロナ時代における本学会の使命であると確認できました。

謝辞

ご多忙の中、多くの方々にご参加いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。また共催いただいた日本 WHO 協会の中村安秀さん、安田直史さん、小笠原理恵さん、柳澤沙也子さんをはじめ、スタッフのみなさんに心より感謝申し上げます。